

A Study of the Historical Tide of SDGs Learned from Ikeda's Lecture "Scholastic Philosophy and Contemporary Civilization"

Koshichiro Mitsukuni

This paper introduces a study of the historical tide of the SDGs as presented in Daisaku Ikeda's lecture "Scholastic philosophy and contemporary civilization". The motivation for this research comes from the need to understand the essence of the problems of modern civilization when private companies tackle the 17 goals of the SDGs. As I was carefully considering this issue, I was enlightened by a line in this lecture that reads, "Scholastic philosophy is the starting point of modern civilization which originated in Europe". Section 2 describes a view of the historical tide in humankind by defining critical of periods of contemporary civilization and its characteristic changes. Section 3 describes important points of Ikeda's lecture. Section 4 considers the viewpoints of the historical tide referred from eight different dialogues between Ikeda and leading thinkers. Finally, from the content of these dialogues, it is proposed that the direction of the SDGs' approach of "no one will be left behind" can be realized by making the concept of "dignity of life" common to all humankind. Through this research, I will show that this lecture has an important role as the origin of the SDGs Philosophy.

講演「スコラ哲学と現代文明」に学ぶ SDGsの潮流

光 國 光七郎

はじめに

(1) 研究の目的

本稿は、2015年に国連において採択されたSDGs (Sustainable Development Goals) の背景に流れる潮流を明らかにする [1、2]。「潮流」というある種の道筋を考察する際に「生命の尊厳」という考え方に着眼する。そこで、1970年代から長年にわたり一貫して国連支援を表明し尽力されている創価学会名誉会長・池田大作博士の1973年の講演「スコラ哲学と現代文明」[3] (以下、本講演と略す) と世界の有識者との対談集に学ぶ。

(2) 研究の動機

著者は民間企業の経営改革を指導・研究する経営工学者の立場からSDGsを民間企業で実践していくことを支援している。本稿の研究動機は、現代文明が生み出した地球温暖化・環境破壊・貧困・病気・人権・ジェンダーなどの人類社会の諸問題の解決に取り組むことを誓ったSDGsの17個のゴールに民間企業が取り組む際に、現代文明の経緯を把握する必要性に迫られたことによる。

SDGs 17個のゴールは、人間の自己との関係において生ずる多様性に関するゴールとして、①あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ、②飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する、③あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する、④すべての人々に包摂的かつ公平で質の高い教育を提

供し、生涯学習の機会を促進する、⑤ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女兒のエンパワーメントを図る、⑥すべての人々に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する、の6項目がある。また、人間と他の人間あるいは社会との関係における多様性に関するゴールとして、⑦すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する、⑧すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する、⑨レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る、⑩国内および国家間の不平等を是正する、⑪都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする、⑫持続可能な消費と生産のパターンを確保する、の6項目がある。そして、人間と自然的環境との関係における多様性に関するゴールとして、⑬気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る、⑭海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する、⑮陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地劣化の阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る、の3項目がある。これらの実現性を確かなものとするためのゴールとして、⑯持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する、⑰持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する、がある [1、2]。

SDGs 17個のゴールはバラバラに存在しているのではなく相互に関係しあっている。たとえば、⑬の気候温暖化に関してCO2排出を削減しようとするならば自動車と発電に使用する化石燃料の使用をやめなければならない。しかし、それでは⑧の経済成長がかなわない。なかでも発展途上にある国々の経済成長は①～⑥の諸問題の自律的解決に欠かせない。また発展途上の国々に対する⑩の国家間の不平等はヨーロッパ諸国の植民地による収奪が歴史的な背景にある。

このように民間企業のエネルギー問題などの本質的原因やきっかけを手繰り寄せていくと他のゴールに行き着くというように、お互いに原因となり結果となるような絡み合いが多層を織りなす。これらの茫漠とした絡み合いの中から企業の取り組み課題をスクープする模索の中で、ヨーロッパ発祥の現代文明が形成され始める起点がスコラ哲学にあるとする1973年の池田大作博士の講演「スコラ哲学と現代文明」が大いなる啓発となる〔3〕。

（3）本論文の構成

本稿は、まず世界史を概観し現代文明の年代と特徴を特定する。また現代文明の諸問題を共有する。次に本講演を学ぶ。そして現代文明の問題解決の方向性について、池田博士と世界の有識者との代表的な対談集から探る。対談者の選定はキリスト教文明圏を中心に1990年前半までの20年間を目安に8人（A. トインビー博士〔4〕、A. マルロー氏〔5〕、R. ユイグ氏〔6〕、A. ベッチェイ博士〔7〕、B. ウイルソン博士〔8〕、K. シン博士〔9〕、C. アイトマートフ氏〔10〕、A. アタイデ氏〔11〕）を選定する。最後に、これらの対談内容から、「誰一人取り残さない」というSDGsの取組方向に「生命の尊厳」という考え方が求められる、という文脈を生成する。

（4）研究の要点

本研究を通して、本講演はSDGsに取組む際の考え方の原点ともいえる重要な位置づけを持つ講演であるということを示す。

2. 世界史の整理と現代文明の範囲

2.1 世界史整理図の作成

一般に用いられる高等学校の世界史教科書を活用して世界史を概観する〔12、13〕。整理方法は世界史教科書とその解説用図説と参考文献から、①地理的に隣接する地域間の交流や民族の移動、②なかでも領土・覇権争い（戦争）、③文化交流、④宗教の発生と広がりを書き出し模造紙サイズの一覧に配置し俯瞰する。この整理図を俯瞰すると、ヤスパースは覇権以外の人間の精神活動から世界史を俯瞰し、紀元前5世紀前後に人間の精神活動が世界各地に同時的

に興る時期を基軸（枢軸）時代と呼び、18世紀の産業革命以降を技術時代と呼んで特徴づけたことが納得できる [14]。

2.2 世界史の概観

（1）ユダヤ教とキリスト教の誕生およびヨーロッパ地域への広がり

基軸時代の紀元前515年頃のヘブライ地域にユダヤ教が成立する。その約500年後の紀元初期頃にキリスト教が分派する。キリスト教は313年のミラノ勅令によってローマ帝国の公認宗教となる。アウグスティヌス（354-430）は三位一体論を説きキリスト教神学の基礎を確立する。教会組織が整備され「神とは何か」を哲学するキリスト教神学が深められる。9世紀頃にはエリウゲナ（810頃-877）がプラトン主義に基づいて神についての考察を深め、スコラ学派と呼ばれる。

（2）イスラム教の誕生およびアラビア半島と中東地域

ムハンマドは610年頃にイスラムを提唱しアラビア半島を武力で制圧する [15-17]。この集団は661年にペルシャ地域を制圧する。その後750年にアッパース朝はイスラム帝国を建国する。9世紀にはいりアッパース朝の第3代カリフ・マームーンは813年頃に「知の館」を設立して近隣の文明圏の諸文化を取り入れアラビア語化し、交易と学問を発達させる [15-17]。1071年頃に東ローマ帝国とイスラム帝国の領土争いが起こる。この争いは1096年の第1次十字軍遠征から1291年の第7次遠征まで200年近い宗教戦争になる。

（3）中世ヨーロッパ地域の合理主義哲学と唯物論の芽生え

十字軍戦争後の13～14世紀の200年間はヨーロッパにおいてルネサンス期が始まる [16, 17]。スコラ学のT. アクイナス（1225年頃-1274）はキリスト教の「神」をアリストテレスの形而上学で説明しようとする。後期スコラ学のオッカムのウィリアム（1290年頃-1349）は哲学を神学から分離し、スコラ哲学を解体する。15世紀にはいると神学は教会中心のカトリック派と聖書中心のプロテスタント派に分かれる [18-20]。

16～17世紀の200年間のヨーロッパは三角貿易を通して富を得る。アフリカ

住民を植民地に奴隷として輸出し、植民地の物財を略奪して本国に持ち帰る。哲学において、16世紀にF. ベーコン（1561-1626）が帰納法を提唱し学問の経験的方法論を確立する。R. デカルト（1596-1650）は自身の中に思考する自我を発見する。またT. ホブズ（1588-1679）は唯物論的で機械論的な社会観・社会契約論を著書リヴァイアサンで示す。

17～18世紀は重商主義による植民地獲得がアジア地域にも広がる。また統治、天文、科学などの分野が発展する。J. ロック（1632-1704）は統治論を著し、神権から王権へ、王権から人権への流れが形成される [18-20]。

（4）近世ヨーロッパ地域の技術的な発展

18世紀に蒸気エンジンが発明され、工場と工業都市とスモッグ公害が生まれる。19世紀にはガソリンエンジンと自動車が発明される。化学の分野では化学肥料や農薬が発明され、20世紀には石油からゴムや樹脂を作る技術が発明される。この新素材技術は環境破壊と化石燃料の大量消費へとつながる。18～19世紀の工業化は資本主義を生む。1848年マルクスは「神」を否定した社会を資本論にまとめ、レーニンがマルクス主義を掲げ1922年に人為的な国家であるソビエト社会主義共和国連邦を樹立する。

20世紀前半は2度の世界大戦を引き起こす。世界大戦終了後の20世紀後半は、唯物論的無神論社会の中でのアメリカとソ連邦の2大国による資本主義と共産主義の冷戦になる。この冷戦は1991年のソ連邦崩壊とともに終る。

2.3 現代20世紀に噴出する諸問題

冷戦後は2大国の覇権により抑えられていた諸問題が顕在化する。たとえば、①戦後処理の領土分割から生じる民族間、統治単位間の争い、②16世紀に始まるアフリカ住民の強制奴隷輸出による人種差別、③植民地化された地域諸国の貧困、④化学的製法による肥料や農薬散布による汚染と健康被害、⑤原爆による後遺症、⑥化石燃料の大量使用による地球温暖化と異常気象、⑦樹脂製品の海洋投棄による海洋汚染、⑧森林伐採による陸上生態系の破壊、などである。これらの現代文明の諸問題は国連においてSDGs17個のゴールに集約され

ていく [1、2]。

2.4 現代文明の範囲と唯物論的無神論社会の特徴

現代社会の諸問題はキリスト教文明圏の工業化に端を発すると推定できる。なぜならもう一方のイスラム圏には、コーランやハディースについて一般市民に哲学する自由はなく、ムハンマドの7世紀から20世紀までの1300年間に独自の技術革新や産業の形成が見られないからである [15-17]。このことから本稿は、14世紀ヨーロッパのキリスト教圏において、スコラ哲学解体前後に「唯物論的無神論社会」が発祥し現代に続くことに注目する。また本稿はこの年代を「現代文明」と総称し、この文明の特徴について人間の精神活動の観点から、①神からの独立：14～15世紀に宗教上の何らかの「神」に縛られない論理的で唯物論的な思考や哲学がみられる、②政治からの独立：16～17世紀に政治権力に縛られない人間精神の自由がみられる、③精神的活動の自立：18～19世紀に哲学と科学に高度な発展がみられる、④暴力と食欲の暴走：20世紀に2度の世界大戦が起こる、と特徴づける。

3. 講演「スコラ哲学と現代文明」の概要

3.1 講演の概要

創価学会名誉会長の池田大作博士 (1903-) は1973年に創価大学において「スコラ哲学と現代文明」と題して学生に向けて講演する [3]。まず「…12世紀から13世紀を頂点に中世ヨーロッパで栄えた哲学の頂点はスコラ哲学であった」と講演の主題を紹介し、「…ギリシャから引き継いだ学問的遺産 (文法、修辞法、弁証法、算術、幾何、天文学、音楽) と神学をどのように関連付けるかが問題となっていた」と当時の背景を要約する。そして「…人間の理性と聖書の啓示の関係、知識と信仰、哲学と神学という、根本問題に触れざるを得ない」との哲学する立場を明らかにし、「…スコラ哲学の第1の父と称されるエリウゲナは『真の宗教とは真の哲学であり、同時に真の哲学は真の宗教である。したがって、宗教に対するあらゆる懐疑は哲学によって反駁されうる』という命題

を立てた」ことに触れる。また「スコラ哲学は出発点からキリスト教信仰を知識・理性によって裏付ける、という制約下にあった」との制約と限界を確認する。そして「…スコラ哲学が果たした第1の役割は、人間としての生き方に明確な指針を示したことである。もう一つは地中海文明の時代からヨーロッパ文明の時代への移行に、決定的なエポックとなったこのヨーロッパ文明が、ルネサンス、宗教改革、ナショナリズムの勃興、等々幾多の変遷を重ねつつも、発展と世界的伝播を成し遂げて、いわゆる現代文明となってきた」と俯瞰する。その後の歴史への影響についても「…スコラ哲学史において、…やがて、キリスト教のゴッドを人格神から真理自体を神とする理神へ、理神から大自然そのものを神とする汎用神へと変質させ、ついには汎用神から無神論へと西洋哲学を導いていく」と、現代の唯物論的無神論社会を到来させることになる起点に、キリスト教神学のスコラ哲学を位置づける。また「…今日、スコラ哲学の風化は、その基盤とする宗教のまったくの無力化によるものといえる…、最大の緊急事は、現代に耐え、現代を導くに足るだけの哲学の樹立であり、その基盤を成す真の宗教の確立である」と、キリスト教の無力化とそれに代わる現代をリードする新たな宗教の必要性を指摘する。

3.2 本講演に学ぶ

本講演は信仰の中心概念である「神」の意味が時代に応じて変質していると指摘する。キリスト教神学は人間の外側に「神」という対象を置いて思考する。また、その「神」を哲学し続けた結果が現代文明の諸問題に至る。このことから今日、その「神」は力を失っていると指摘する。このスコラ哲学への認識について、池田博士と対談されたC. ウイックラマシング博士は「…『神の栄光のために』という目的意識によって解読した神の暗号、つまり科学的発見が、キリスト教会の主張する教義と食い違っていた…」と指摘し、池田博士の見解に賛同される [21 (上)、P.186]。

3.3 本講演の意義

本講演は、東西冷戦の最中1973年に、まだ誰も現代文明の本質を論じていない段階において、①現代文明はキリスト教神学の「哲学する」ことから始まり、②その哲学は唯物論的無神論社会を作り出して人類の生存を脅かす存在にまで膨張し、③神は無力化して人間の精神を統御できずにいる、と喝破する先駆的な貴重な講演であるといえる。また、この講演の直後から池田博士は、自ら設定した問題認識の共有化と、人間の善性の精神力を取り戻す解決の方途について、世界の有識者との対話を開始し実践する。

そこで、次章に池田博士と世界の有識者との代表的な対談集から解決の方途を学ぶ。

4. 世界の有識者との対談に学ぶ

4.1 A. J. トインビー博士

池田博士はイギリスの歴史学者トインビー博士（Arnold Joseph Toynbee, 1889-1975）と1974年に対談し「二十一世紀への対話」を1975年に出版する〔4〕。

内容はトインビー歴史観の骨格を成す戦争と政治の問題、キリスト教、イスラム教、仏教など多岐にわたり、トインビー博士自身が内容を要約して序文に「二人は宗教こそが人間生活の源泉であると信ずる点で同じ見解に立っている。…二人の共著者とその哲学論、宗教論を交わすにあたって人間本性中の意識下の心理層にまで分け入り、そこにいつの時代、いかなる場所においてもあらゆる人間に共通する、人間本性の諸要素ともいうべきものにまで到達している…」と最高峰の対話ができたと述べる〔4（上）、P.10〕。

対談の終盤においてトインビー博士は「新しい文明を生み出し、それを支えていくべき未来の宗教というものは、人類の生存をいま深刻に脅かしている諸悪と対決し、これらを克服する力を、人類に与えるものでなければならない。これらの諸悪のうち最も恐れるべきものは…生命そのものと同じくらい歴史の古い貪欲であり、文明と同じくらい歴史の古い戦争と社会的不公正です。…新たな悪は…科学を技術に 응용して作り出した、人為的環境です」と問題提起

する [4 (下)、P.134]。これに対して池田博士は「…貪欲は人間の内面にあるものであり、戦争や社会的差別は人間対人間、つまり社会の次元にあるものであり、環境破壊は人間対自然の関係に生じる問題です。この自己—社会—環境という3つの範疇について、仏法では“三世間”として解き明かしています。…結局、私は、この3つの関係を正常なものとするに、最大の努力を注がなければならないと信ずるのです」と述べ、「そのためには人間一人一人が自己の生命の内奥からの変革を目指さなければならないでしょう。これを可能にする宗教こそ、未来の宗教たりうる」と未来の宗教が備えるべき要件を示す [4 (下)、P.135]。そしてキリスト教、イスラム教、仏教などの宗教について吟味し、人間の、行動の基準となる価値体系に「生命の尊厳に至上の価値を置くことを、普遍的な価値基準としなければならない」と提唱する [4 (下)、P.239]。トインビー博士は「(生命の) 尊厳性—それがなければ我々の生命は無価値であり、人生もまた幸福にはなりえないその尊厳性—を確立するよう、一層努力しなければなりません」と賛同し対談を締めくくる [4 (下)、P.246]。

この対談からは、人間の行動の基準に「生命の尊厳」を置くべきであると、し、「自己—社会—環境という3つの関係を正常なものとする」という方が学べる。

4.2 A. マルロー氏

池田博士はフランスの政治家でもあるマルロー氏 (André Malraux, 1901-1976) と「人間革命と人間の条件」を1976年に出版する [5]。

第1回目の対談において、池田博士は「21世紀にあっては…人間、社会の底流を貫くものは『生命の世紀』でなければならない…、人類の未来について考える場合は、教育問題が最も大事だ」と提起する。マルロー氏は「同感です…、重要なことは知識の伝達ではなく、いかにして人間を形成するか」と述べる [5、P.54]。そして再会を約して対談を終える。

第2回目の対談において、マルロー氏が「…今日の文明をもっとも特徴づけているものは、あきらかに、決断の不足であると私は考えています」と提起す

ると〔5、P.87〕、池田博士は「…人間の尊貴さを守り抜くという決断こそ、いま要請される行動のもっとも底流を形成していかなければならないと考えます。…人間の、さらにいえば生命の尊厳を守るという視座を確立することが必要です」と応ずる〔5、P.91〕。またマルロー氏が実践者の立場から「…現在、もっとも重要と思われる現象は、普遍的理想などというものが、もはやどこにも見当たらなくなってしまった」と運動の方向性が見失われていると指摘すると〔5、P.97〕、池田博士は「私たちの人間革命運動は、内なる宇宙、つまり自身に内在する創造的生命を自身の手によって開拓する、人間自立の変革作業です。人間が新たな生命的思想の高みに立って21世紀を展望し、築き上げていこうという運動です」と、新たな運動の方向性を示す〔5、P.103〕。するとマルロー氏は「…とにかく計り知れない変化が起こるに相違ありません。先に申し上げた精神革命としか呼びようのないような」と展望する〔5、P.110〕。池田博士は「精神革命ですね。その考えは私たちの運動が目指す人間革命に通じると思うのです」と確認すると「私もそう思います」とマルロー氏は同意する〔5、P.110〕。

この対談からは、現代文明の諸問題を解決するために「生命の尊厳を守るという視座を確立すること」が必要であり、そのための行動・運動は「一人一人の人間革命から始まる」と共感していることが学べる。

4.3 R. ユイグ氏

池田博士はフランスの美術史家ユイグ氏（René Huyghe, 1906-1997）と1975年の歓談を機に、「闇は暁を求めて」を1980年にフランスで出版する〔6〕。

内容は、現代の危機、その歴史的意味、危機に直面する社会、人間の再発見、芸術的創造、宗教的飛躍、と幅広い。たとえば、ユイグ氏が「…宗教が礼拝儀式と神学の教条主義の中に埋没していない場合、そうした宗教以上に、…純粋な精神性を超えているものとして何があるでしょうか」と問うと、池田博士は「…教義や儀式が必要であっても、もっと発展した段階に至ると、教義や儀式、戒律から進んで、神秘的飛躍へ入っていかなければならないというの

が、あなたのお考えと理解します」と質問の趣旨を確認し、仏教においても修行者の能力に応じてそういった段階を示してきたことを述べて「…日蓮大聖人は、こうしたすべてを包含した1つの実践法を確立し、すべての人が平等にできる実践と、平等に悟りの獲得できる道を教えたのです。…それは、仏法の究極の悟りをあらわしたマンダラに向かい、これを信じて、南無妙法蓮華經の題目を唱えることです」と神秘的段階は不要であると述べる〔6、P.452〕。ユイグ氏は「人間の概念について…私たちの存在を確保するための物質があり、つぎに…私たち自身についての行動を明らかに理解させてくれる知性があり、そして…私たち自身の存在理由を垣間見させてくれるために精神があります。…宗教が人間の能力の多様性に適応するものでなければならないことは明らかです…自分自身で、もっぱら自らの人格の努力によって前方への歩みを試み、…また試みるべきでしょう」とこれからの宗教が備えるべき要件を示す〔6、P.537〕。

この対談からは、これからの宗教が備えるべき要件は「人間精神の変革をリードすることである」と示していることが学べる。

4.4 A. ペッチェイ博士

池田博士はイタリアのローマクラブ会長ペッチェイ博士 (Aurelio Peccei, 1908-1984) と1974年に対談し、「二十一世紀への警鐘」を1984年に出版する〔7〕。

内容はペッチェイ氏の論文「人間と自然」とその対話、池田博士の論文「人間と人間」とその対話、「人間革命」についての両者の論文とその対話、の3編から構成される。

ペッチェイ博士は「人間と自然」編において「…人間は…この惑星上の貪欲で鈍感な暴君として振る舞うことをやめない限り、自らの地位が危うくなり、まったく短命に終わるかもしれない」と現代文明の危機が人間の貪欲にあると指摘する〔7 (上)、P.32〕。また「…この危機はユダヤ・キリスト教的伝統から発達して、その後世界各地に広まった文明に起因する“文化的”危機であり…」と原因を特定し〔7 (上)、P.48〕、解決の方向性は「…自然との和解・調和こそは、人間開発 (ヒューマン・デベロップメント) と並んで現代の基本的な絶対

必要事項であり…」と指摘する〔7（上）、P.61〕。そして「ローマクラブの報告は、成長のための成長を立派な目標であるとする考え方を否認し、“有機的成長”、“持続的成長”、“開発（デベロップメント）”等の新しい概念が生まれる道を開きました」と評価する〔7（上）、P.67〕。

池田博士は「人間と人間」編において「…自己の生存を支える基盤は、巨大で複雑な人間関係が作り上げている社会機構——統治機構や生産機構、流通機構等々——に負っています。…この機構が有効に作動していくために…『支配—被支配』の関係が生じます。…私が問題にしたいのは、この支配者の求める喜びということです。…この喜びのなかに、恐るべき魔性が潜んでいることを仏教は教えています」と人間の本性に迫る〔7（上）、P.154〕。ペッチェイ博士は「人間は——信仰者であれ無信仰者であれ——この世で善いことをすべきであるという仏教やキリスト教の信念を、…私も自分なりのささやかな方法で、応用するつもりです」と応じる〔7（上）、P.189〕。池田博士は「仏教では、他者の利益・幸せを犠牲にして自己の利益を追求することを悪とし、他者や人間社会全体の幸せのために貢献することを善とする」という善悪の行動基準を明らかにする〔7（上）、P.242〕。

ペッチェイ博士は「人間革命」編において「人間革命の必要と希求を主張するにあたって、私は、宗教的信仰には一切依存していません…あなたが仏教の信仰を指針とされ、また私たちはそれぞれに異なる観点から出発し…ともに同じ種類の人間の心の変革を論じているということです…人間はなによりもまず物質革命への心酔から覚めなければなりません」との立場を示す〔7（下）、P.66〕。そして両者の人間革命論について考え方を交換する。池田博士は「人間は自然に対して、支配者ではなくて調整者でなければならない…貢献者でなければならないという考え方が、今こそ基本的態度として徹底されるべきである」と、環境に対して人間が果たすべき役割を示す〔7（下）、P.93〕。ペッチェイ博士は「より高度な目的に自らの欲望を貢献させていかなければならない…これはわれわれの欲望をコントロールする人間革命によってのみ可能となる」との考えを示す〔7（下）、P.120〕。

この対談からは、現代文明の諸問題の解決に取り組む人間には、欲望を統御する人間革命が求められ、また自然に対して調整者であるべき、とする考え方が学べる。

4.5 B. ウイルソン博士

池田博士はイギリスの宗教社会学者ウイルソン博士（Bryan Ronald Wilson, 1926-2004）と1978年に対談し、「社会と宗教」を1985年に出版する〔8〕。

内容について池田博士は、これまでのトインビー博士（歴史）、ユイグ氏（美術史）、ベッチェイ博士（技術文明）との対談に対し、「…宗教そのものを取り上げた点で、より一層、問題の核心に近づくことができた…」と述べる〔8（上）、P.19〕。

ウイルソン博士は「…意識や生活様式の正真正銘の変革は、人々が自主的に賛同し、内面に受け入れ、『自分自身のもの』とした、内面の価値観から生じるものでなければなりません」と述べ〔8（下）、P.371〕、「人間と自然の適合を回復する価値観を弘めることは…ユダヤ教・キリスト教・イスラム教の伝統を持つ諸宗教には、不適切な仕事であるかもしれません。『人間は自然より優位にある』というのがキリスト教の有力な考え方であり、…これらの諸宗教の伝統に深く根差した思想です。プロテスタントの社会では、こうした方向性が、人間が自然を支配すべきであるという主張となって開花し、この気質が科学技術の発達に大いに貢献しました」と現代文明の根源に迫る〔8（下）、P.373〕。そして、「…人間による自然の支配から生じている不都合な結果を、大多数の人々にわからせるためには、たしかに新しい価値観を普及しなおすことが必要でしょう。もし、仏教が、これらの価値観を人々に提供して、環境破壊から生じる損害や危険に目覚めさせることができるなら、仏教は、人類を人類自身から救ううえで、決定的な役割を演じることができる」と仏教に期待を寄せる〔8（下）、P.374〕。

この対談からは、現代文明の根源にユダヤ教・キリスト教・イスラム教の伝統を持つ諸宗教があり、それらの諸宗教では「人間は自然より優位にある」と

考えるので、現代文明の諸問題は解決できないという指摘が学べる。そして現代文明の諸問題の解決のために仏教の貢献が期待される、ということが伝わってくる。

4.6 K. シン博士

池田博士はインド文化関係評議会副会長シン博士 (Karan Singh, 1931-) と1979年から対話を重ね、「内なる世界—インドと日本」を1988年に出版する [9]。

対談の趣旨について両者は「…ヒンドゥー教と仏教という違いを超えて、共通に有している人間の心への洞察と、その本能的・盲目的衝動を克服せんとする英知の開発の伝統は、かならずや、現代の危機に対する人類の挑戦に資する…」と述べる [9, p. 3]。シン博士は「…人類は自然の一部であり、人類の繁栄は他のすべての生物と切り離して考えることはできない、…われわれ東洋人は生きとし生ける者は神聖であると信じております」 [9, p.223]、また「…地球をたんに土や石や水といった物質の塊とは見ておりません。地球は一個の精神的実在であり、原始の泥上の海に最初の生命を出現させるまで何十億年もの間、意識をはぐくんできた母であると考えております」と指摘する [9, p.225]。池田博士が「…西洋では生命の尊厳といっても、人間のみの尊厳である…東洋では、人間と他の動物とは融合していくべきだとする考え方が伝統的に受け継がれてきました」と西洋と東洋の違いを確認する [9, p.271]。シン博士は「…西洋文明を特徴づけてきた人間中心の迷妄を捨て去り、あらゆる存在に対して懸命で、啓かれた態度をとることが極めて重要です」と賛同する [9, p.271]。また「…セム系の宗教が転生の概念を神学上受け入れることは、まずありえない…しかし…敬虔な西洋人を人間以外の生命体の尊厳性に目覚めさせ、認めさせることは可能」と期待する [9, p.272]。

この対談からは、生命の尊厳観の背景に東洋の輪廻、転生、業の考え方が参考になるとの指摘が学べる。また西洋社会に生命の尊厳を伝えることの難しさも期待が伝わってくる。

4.7 C. アイトマートフ氏

池田博士は元ソ連大統領ゴルバチョフ氏の側近アイトマートフ氏 (Chinghiz Aitmatov, 1928-2008) と1988年に出会い、「大いなる魂の詩」を1991年に出版する [10]。

内容は、唯物論的無神論社会を現実化したソ連社会の姿や、その中で遅く生きる人間の魂について語りあう。アイトマートフ氏は「…仏教徒にとっては…『科学は犠牲を要求する』というような弁解は通用しないのですね」と質問する [10 (下)、P.329]。池田博士は「…『共生』を根本にする仏教にとって『犠牲』は認められない概念です…『不殺生』ということは…生命の尊厳を第一義とする仏教にとって、文字通りの生命線です」と述べる [10 (下)、P.329]。またアイトマートフ氏は「そのためには、キリスト教徒なり、イスラム教徒なりがどうしても仏教に改宗しなければならないのでしょうか」と問うと [10 (下)、P.337]、池田博士は「…核兵器や環境破壊などの地球的問題群にあっては、宗教的教義にもとづく『改宗』うんぬんは、第二義的な問題に過ぎない…第一義的に重要な問題は、その教義にのっとって、宗教が核兵器や環境破壊などの諸悪に対してどう判断し、どのような態度で臨むのかという、人間観、自然観、宇宙観なのです」と述べる [10 (下)、P.339]。

この対談からは、唯物論的無神論社会の下で強制的に改宗させられ、精神の自由が奪われた生々しい姿や、再び精神の自由を取り戻す際の戸惑いが伝わってくる。そして①異なる宗教を信仰する人々にとっても「生命の尊厳」は共通の価値観・哲学である、②「自己-社会-環境」の問題群の範疇に応じて行動する、ことの重要性などが学べる。

4.8 A. アタイデ氏

池田博士はブラジルの人権闘争家アタイデ氏 (Austregésilo de Athayde, 1898-1993) と1993年の対談をベースに、「二十一世紀の人権を語る」を1995年に出版する [11]。

アタイデ氏は「…あらゆる偏見を取り除いた洗練された平等観というもの

は、宗教的感覚の妙なる法理に則るものであります。その平等観が最も民主的な原則として確立するとき、『世界人権宣言』は不滅のものとなるでしょう…」と対談を要約する [11, P.4]。池田博士が「仏教思想では、人間のみならず、万物に普遍する“宇宙根源の法”が生命の『尊厳』の基盤であるにとらえています。そこに人権の普遍性と尊厳性の根拠もある。キリスト教の思想が、神の前における『平等』を説くのに対して、仏教の『平等』の思想は、すべての人々に「内なる普遍の法」が備わっていることに由来します。しかも、その法の覚知が万民に開かれていると知ることによって『本質的平等』に目覚めるのです」と「人権」と「尊厳」の根拠について指摘する [11, P.156]。アタイデ氏は「…人間のうちに“聖なるもの”を見る視座がなければ、人間の尊厳という思想の根はできないでしょう。その意味から、私は仏法の考え方に強く共感しているのです」と賛同する [11, P.157]。また池田博士が第一世代の人権、第二世代の人権、第三世代の人権について意見を求めると、アタイデ氏は「世界の民衆は、人種の違い、社会・政治の違いから生じる差別意識を乗り越えて、池田会長の教えを学び求めているのです。会長の妙なる提言は希望の夜明けをもたらすだけでなく、われわれの眼前に現実となって現れると確信しています」と賛同する [11, P.187]。

この対談からは、SDGsで必ず話題になる“差別”、“平等”、“人権”という人間の本性にせまる考察をしようとするならば、仏教の考え方を学ぶべきである、と世界人権宣言の闘志・アタイデ氏が述べていることが学べる。

5. 文脈の考察

5.1 文脈の生成

本講演を機に、著者は独自に世界史を整理・俯瞰する。そして現代文明の年代を14世紀から20世紀までの700年間とし、その特徴について、人間の精神活動は、①14～15世紀に宗教（神）から独立（哲学）する、②16～17世紀に政治（王権）から独立（人権と自由）する、③18～19世紀に自我と理性に目覚め自立（科学と技術）する、④20世紀に暴力と貪欲が暴走（2度の世界大戦）する、の

4つに整理する。この整理から本講演が指摘する現代文明の諸問題の真因について、セム系の宗教が示す「人間が自然を支配すべきである」という主張が紀元前5世紀頃から存続し、14~15世紀に人間の精神活動が神から分離した後も、その主張が人間の行動を規定し続け、人間の貪欲のままに環境破壊に至る、との文脈が浮き彫りになる。

また、前章の対談者らはその解決の方途について、①21世紀以降の人類の文明をリードする精神性が備えるべき要件は、自然も生命それ自体であるとしたうえで「生命の尊厳」を説く哲学であり、②その哲学は一人一人の人間精神（中でも貪欲と暴力と支配欲を統御し善性を強める力）の変革を可能とする普遍性があり、③その運動は誰人にも実践可能なものでなければならない、と指摘する。また対談者らは、④その哲学とは大乘仏教（中でも法華経を継承する日蓮大聖人の仏教）を指し、⑤その運動を推進する団体とは池田博士を指導者とする創価学会であろう、との期待を述べる。

5.2 文脈の生成から得られる研究動機とのつながり

近年、SDGsに取り組む企業が増え地球温暖化や環境破壊の解決のための技術開発が進む。しかし、「人間が自然を支配する」という根本の動機が改まらないまま新技術が開発されても新たな何らかの自然支配を生むという悪循環は止まない。人間は自然の一員であり「生命の尊厳」を守る、という考え方が人間精神の根底に刻み込まれていなければならない。そして技術開発を指揮する経営者には「貪欲と暴力と支配欲を統御し善性を強める心根」がなければならない。著者の研究領域である企業の経営管理にあっても「生命の尊厳」を理解したうえで企業存続の適正な利潤確保に努め、企業活動それ自体がSDGs17個のゴールの解決につながるように事業構造を設計し改革していくという動機が本講演から得られる [22]。

6. おわりに

本稿は、まず世界史の概観から現代文明の年代を特定し、その文明が生み出

した「唯物論的無神論社会」での諸問題はSDGs17個のゴールとして認識されるに至った、ということを示した。またその原因は「人間は自然を支配してよいと考え、貪欲と暴力と支配欲の統御がなされないまま暴走している」と指摘されていることを示した。次にこの問題は1973年に池田博士が講演「スコラ哲学と現代文明」において考察し、その後、池田博士は世界の有識者と対話を進め、「生命の尊厳」という人類共通の考え方に立って「人間が持つ善性の精神力を引き出す」という解決の方途を提唱し実践を続けているということを示した。このように本講演は、SDGsに取り組む人々にとって考え方の原点ともいえる方向性を示す重要な位置づけを持つことを示した。

参考文献

- 1) 国際連合広報局：『我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ』、国際連合、http://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/ (2016)
- 2) IGES 編：『SDGs Compass』、公益財団法人地球環境戦略研究機関 (2017)
- 3) 池田大作、「スコラ哲学と現代文明」、『創立者の語らい (上)』、pp.74-90、創価大学学生自治会 (1985)
- 4) A.J. トインビー、池田大作、「二十一世紀への対話 (上中下)」、聖教新聞社 (2002、2003)
- 5) A. マルロー、池田大作、「人間革命と人間の条件」、聖教新聞社 (2002)
- 6) R. ユイグ、池田大作、「闇は暁を求めて」、講談社 (1981)
- 7) A. ペッチェイ、池田大作、「二十一世紀への警鐘 (上下)」、聖教新聞社 (2009)
- 8) B. ウイルソン、池田大作、「社会と宗教 (上中下)」、聖教新聞社 (1996)
- 9) K. シン、池田大作、「内なる世界—インドと日本」、東洋哲学研究所 (1988)
- 10) C. アイトマートフ、池田大作、「大いなる魂の詩 (上下)」、聖教新聞社 (1998)
- 11) A. アタイデ、池田大作、「二十一世紀の人権を語る」、聖教新聞社 (2009)
- 12) 木村靖二、岸本美緒、小松久男、「詳説世界史研究」、山川出版社 (2017)
- 13) 谷澤伸、甚目孝三、柴田博、高橋和久、「世界史図録ヒストリカ」、山川出版社 (2005)
- 14) ヤスパース、松代和郎訳「哲学的思惟の小さな学校」、昭和堂 (2020)
- 15) 井筒俊彦、「マホメット」、講談社 (1989)
- 16) 井筒俊彦、「イスラーム文化」、岩波書店 (1991)
- 17) 井筒俊彦、「イスラーム哲学の原像」、岩波書店 (1980)
- 18) 佐藤優、「キリスト教における神権と人権」、東洋学術研究、Vol.59、No.1、pp.5-29、

東洋哲学研究所（2020）

- 19) 佐藤優、「神学の思考」、平凡社（2005）
- 20) 佐藤優、深井智朗、「近代神学の誕生」、春秋社（2019）
- 21) C. ウイックラマシンゲ、池田大作「『宇宙』と『人間』のロマンを語る（上下）」、毎日新聞社（1992）
- 22) 光國光七郎、「SDGs時代の経営管理と心根」、早稲田大学出版部（2019）